

平成31年度
劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)
成果報告書

団 体 名	公益財団法人かすがい市民文化財団	
施 設 名	春日井市民会館	
助 成 対 象 活 動 名	人材養成事業・普及啓発事業	
内定額(総額)	1,322	(千円)
公 演 事 業	0	(千円)
人材養成事業	333	(千円)
普及啓発事業	989	(千円)

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価
<p>社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。</p>
<p>人材養成事業の「若手音楽家支援事業」は、芸術大学を出てもなかなか地域に貢献できない若手音楽家の活動を支援するものである。コンサート、アウトリーチという段階的に組んだプログラムによって、自分たちがどう活動していくかを考えていく内容となっている。今回は登録1期生たちの合同コンサートを行い、音楽家たちの交流も生まれた。2期生のうち1つのコンサートが新型コロナウイルスの感染拡大により、延期となった。</p> <p>普及啓発事業の「昼コン&夜コン」は、春日井市で16年続いている事業のため、地域に根付いており、予定通りに進められた。要望書の目標値を500人超える集客を誇ることができた。しかしながら、「親子のためのはじめての音楽会」は、3月18日に予定されていたものの、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、中止となった。</p> <p>「かすがいどこでもアート・ドア」は、去年は学校の要望が実演芸術に関しては少なかった反省を活かし、より地域に出ていく方針へ転換した。若手音楽家たちを中心に、保育園や福祉施設、老人会など、市内の様々な場所へ出向き音楽を届けた。昨年テストケースで行い、東部地区での文化活動の活性化を狙った「ダンス講座」が非常に好評だったため、5回に回数を増やしたが、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、2回までの開催となった。</p> <p>「かすがい文化フェスティバル」は、参加人数は要望書の目標値より下回ったが、実演芸術以外（手芸、茶道、書道など）のプログラムを含めると当初の参加者数の目標値には達成する。昨年好評だった職員手作りの謎解きゲームも、内容が更にレベルアップし、参加者の満足度も高く、予定通り終了した。</p>
<p>助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。</p>
<p>会場となっている春日井市民会館と文化フォーラム春日井は、春日井市の文化活動の拠点として位置付けられている。</p> <p>今回助成をいただいた中で、「昼コン&夜コン」は16年継続しており、地域に根強い音楽会である。主に中部地方を中心に活動しているプロやセミプロの演奏家たちに、無料で聴けるコンサートを月2回（金曜夜、土曜昼）行ってもらっている。交流アトリウムという、誰でも気軽に立ち寄れる空間で行うコンサートには、乳幼児連れの親子から、施設内にある図書館帰りの学生、年配の方まで幅広い客層の様々な人々が訪れる。近隣の老人介護施設から車椅子で来館される利用者もいて、バリアフリーで楽しめるコンサートとして認知されている。毎回、このコンサートを楽しみにされている市民の方々も多く、昼は250人前後、夜は150人前後の来場者が訪れる。今後も文化フォーラム春日井を代表する催しとして継続してゆく。「はじめての音楽会」は本年は新型コロナウイルスの感染拡大防止で開催できなかったが、非常に高い集客力を誇り、ニーズがあると認められる催しである。状況が改善したら再開したい。</p> <p>「かすがいどこでもアート・ドア」「かすがい文化フェスティバル」は、元々春日井市が行っていた事業と、当財団のアウトリーチ事業、夏休みの子ども向け事業（昼涼み事業）とを統合し、当財団に一括して委託されたものになった。いずれも、ここ数年は申し込み多数で抽選になる人気となっており、市民のニーズに応える文化事業として根付いている。「かすがいどこでもアート・ドア」は地元貢献したいという若手音楽家たちの支援の場もなっており、「若手音楽家支援事業」にも繋がっている。そして「かすがい文化フェスティバル」は、地元で活動を行う春日井市文化協会加盟の方々を中心として、今後も継続してゆく事業である。</p>

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

「若手音楽家支援事業」では目標値を超える集客があった。音楽家たち個人個人の営業努力にも支えられ、ともに作り上げることができた事業である。延期となったコンサートがもし開催されていれば、さらに多くの集客が見込めたのではないかと思う。

「昼コン&夜コン」では、アンケート集計から、今年度も引き続き「満足」「まあ満足」と満足度がほぼ100%と非常に高い満足度を誇る。無料でクオリティーの高い演奏を聴けるコンサートとして、安定した高評価を得ている。

「かすがいどこでもアート・ドア」で派遣したギタリストの井草氏は、演奏も素晴らしいが、それと共に生徒へ伝えるメッセージ性の高さに定評がある。引きこもりだった中学生の頃、ギターに出会って人生が変わった、という彼の経験談は、多感な中学生の心に響く。迎え入れていただいた学校からも非常に評価が高く、3年連続で来て欲しいとのリクエストをいただいた。また、今年度は、様々な理由で学校に通えなくなった子どもたちを支援する「あすなる教室」での演奏を行った。自分と同じような体験をした井草氏の言葉は子どもたちの心に響き、またそのメッセージにカブけられ涙ぐむ保護者の姿も見られた。

その他、若手音楽家たちが地域に出向き、出張演奏を行った。クオリティーの高い演奏に、どの場所でも非常に喜ばれた。特に幼稚園・保育園・小学校で人気の高い「パプリカ」を演奏したときは、子どもたちが立ち上がって踊りだし、演奏者を巻き込んで大盛り上がるのひと時となった。いずれも、また来年もお願いしたい、という声が高く、アンケート結果も非常に好評である。

「かすがい文化フェスティバル」でも、今年も引き続き、子どもたちからたくさんの「楽しかった」という感想が寄せられた。「親子で挑戦！謎解きゲーム in 春日井市民会館」は、昨年度からさらにパワーアップした内容で、職員が工夫して謎を作った。参加者は普段は立ち入ることのない市民会館の音響室に入ったり、屋上に出たりして、楽しく謎解きを行った。アンケート回答は「楽しかった」「まあ楽しかった」で100%となり、子どもたちに非常に好評に受け止められた結果である。

<かすがい どこでも アート・ドアの様子>



←「あすなる教室」での演奏

↑小学校での「パプリカ」演奏

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

「昼コン&夜コン」は会場となっている交流アトリウムで、快適に過ごしていただける日程で開催を行っているため、4～6月、9月～11月の期間としている。17年続いている催しのため、広報から公演日までの一定のフォーマットができており、職員手作りのコンサートでありながら、過度な負担にならない工夫を行っている。

「かすがいどこでもアート・ドア」については、事前に希望団体からの申し込みをいただき、抽選の結果、アーティストとの日程調整を行った。相手方の要望と当館の予定、そしてアーティストの都合の3者を合わせることが難しいが、なんとかうまく収まった。「ダンス講座」については、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、5講座の予定が2講座のみの開催となった。お試して1回体験した参加者が、次も参加したい！と望んだ人気講座で、どの回も定員にほぼ達していたのだが、中止となったのが残念である。要望は多いので、状況が改善したら再開させたい。

「かすがい文化フェスティバル」については、子どもたちの夏休み期間のイベントとして定着しており、予定通り進められた。

事業費については「昼コン&夜コン」で、毎回ほぼ1万円を超える寄附金を市民から頂いている。出演者についても、比較的安価な金額で出演いただいております。適切であると考えている。

「かすがいどこでもアート・ドア」および「かすがい文化フェスティバル」についても、交通費込みの金額であり、事前準備等も含めると、妥当な謝金といえる。

事業費については、どの事業においても適切であり、当初の計画どおり進められた。



↑ ダンス講座 の様子

「かすがい文化フェスティバル」
の劇場探検
謎を解いて最後の宝箱が
開いた時の様子 →



(4) 創造性

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

「昼コン&夜コン」は、複合文化施設である文化フォーラム春日井のエントランス空間「交流アトリウム」で行うコンサートであるが、その大きな魅力が“音楽との偶然の出会い”である。図書館やギャラリーに訪れた市民が生演奏の音に導かれるように客席に腰掛け、ほんのひととき芸術文化に触れられる機会は大変貴重である。会場は全面ガラス張りであり、市役所前の広場からの見通しが良く、市役所に訪れた市民の心も癒す。この事業と施設特性は、芸術文化の裾野をひろげる上で重要であり、行き交う人々が一時足を止めて耳を傾ける姿は、地域の文化拠点の象徴的な一場面である。最近では写真や動画撮影も可とし、SNSなどで拡散されることで賑わいが視覚化され、事業の認知度も向上し、来場者も増加傾向にある。

普段、文化施設を訪れることが少ない市民にリーチする「かすがいどこでもアート・ドア」は、今年度から市から移管されたアウトリーチ事業も加わり、事業規模が拡大した。派遣アーティストは若手音楽家支援事業で複数年支援する音楽家が中心であり、若い音楽家が経験値を積むとともに、今後も本事業にかかわらず地域で活躍するためのPRの場となった。このような取り組みが単発の出張コンサートや体験講座で終わらないよう、「昼コン&夜コン」はじめ、様々な機会でも若手音楽家の活動の場を提供している。

「若手音楽家支援事業」は、登録アーティストがワンコインコンサートを行うスタイルをベースとしているが、今年度は特別編として合同でクリスマスコンサートを行った。普段別々に活動している音楽家同士が協働で1つのコンサートをつくりあげる過程は、横のつながりをつくる良いきっかけとなり、互いに大きな刺激を受ける貴重な機会となった。

また、本事業は入場500円のチケット制であるが、会場内で「若手音楽家支援事業」の寄附金を募集したところ、活動を支援したいと95,131円もの寄附が集まった。「昼コン&夜コン」も運営費として寄附金を活用しており、その額は200,569円にもなる。ともに対価性のない寄附であるが、寄附者には芸術文化のサポーターとしての自覚を感じていただけるよう、チラシに氏名を掲載するなどの取り組みを行っている。市民が事業の理解者・支援者として、芸術の新しい芽をともに育てており、このような関係性の変化から、コンサート終演後は観客自ら座席を片付け、ゆるやかに運営をサポートしてくれている。従来のサービスの提供者、受益者という関係性から、ともに事業を支える「コモン的な事業」へと変わりつつあると感じている。

これらの事業に関わる芸術家と市民の距離を近づける媒体として、情報誌FORUM PRESSとWEB、SNSを活用している。誌面巻頭で「あのひと、春日井と」というコーナーを設け、地域で活躍する芸術家などを紹介し、芸術家を通して地域の魅力を感じられる工夫を行っている。

施設のエントランス空間
交流アトリウムで行われる
「昼コン」の様子 →



自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながっていた（と認められる）か。

「若手音楽家支援事業」の支援対象者である地元のアーティストたちを中心に、市内のコミュニティ施設や保育園、福祉施設へ「かすがいどこでもアート・ドア」としてアウトリーチ活動を行った。その結果、「地元で足を運んでくれたアーティスト」として身近に感じた市民が、普段ホールに足を運ばない方でも、若手音楽家のコンサートに出向いてくれるようになった。アウトリーチ→コンサートへと、ステップアップする流れができつつある。これを止めることなく、市内の隅々まで浸透させていくことで、市民が実演芸術に触れるきっかけを今後も作っていききたい。この実績により、市内の別団体が管理する植物園や市民病院からも、コンサートの開催依頼を受けた。領域横断的な拠点連携を行い、多様な人々が連なるフックを有していきたい。

また、若手音楽家については、座談会を行い、その内容を広報誌に掲載した。アーティスト同士の横のつながりを作ることで、他人の取り組みに目を向ける機会となり、自身の公演内容の見直しにも、新たな発見にもつながった。若手音楽家だけではなく、かすがい文化フェスティバル講師などにインタビューを行うことで、それぞれの課題や悩み、背景を知ることによって、適切な事業展開にもつながっている。

「かすがい文化フェスティバル」は、劇場音楽堂の技術や人材をフル活用して、夏の暑い時期に公立文化施設に多くの子どもたちを集ってもらうための、ワークショッププログラムで、令和元年度で10年目を迎え、夏の定番事業として、実演芸術はもちろん、それ以外の美術等のワークショップを含め1,000人を超える親子が参加した。今年度も実施した「劇場探検ツアー」は、職員の持つスキルをフル活用して、音響や照明など技術的な面はもちろん、生の音楽に触れる機会も提供し、家族そろって参加された市民に好評を得た。

各ステークホルダーとは、実際の距離も近いことから頻りに face to face の情報交換を行い、ニーズ等を把握し、随時、事業に反映している。また、財団全体の取り組みを写真や図を使ってわかりやすく冊子にまとめ配布している。ウェブサイトなどのデジタル媒体はもちろんのこと、デザインのスキルを持つスタッフがチラシ一枚から丁寧かつ迅速に作ることで、各ステークホルダーからの信頼を得ることができている。



広報誌での、若手音楽家の紹介ページ
上:座談会 下:アウトリーチの様子等

(5) 持続性

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展した（と認められる）か。

当財団は、芸術監督等、組織を強力に牽引するカリスマ芸術家や経営者がいないことを逆に強みとして、職員一人一人のベクトルがそろった組織力を活かしている。管理職の内、1名は財団プロパー職員であり、3名のマネージャーが現場の責任者として事業を牽引する。

事業企画は、管理職と正規職員が全員出席する企画会議で検討を重ねて決定しており、職位、職責に関わらず誰でも企画を提出できるのが特徴。ただし、事業の質を担保するために専門職であるプロデューサーのチェックを受けてから提案している。また、すべての事業の開始時に、事業担当者、広報担当者、プロデューサー、マネージャーによるキックオフミーティングを行い、前年度の反省点の確認や新たなアイデア、広報戦略について話し合い、事業の改善につなげている。

事業の主担当者は全員、無期雇用の正規職員である。平成30年1月に嘱託職員制度を廃止（再任用除く）し、職責の異なる正規職員と臨時職員のみとすることで同一労働同一賃金を実現している。当財団の正規雇用率は令和元年3月末時点で66%であり、28年度に3年有期雇用から無期雇用に転換した。離職率も大幅に減少し、産休育休の取得率も向上し、令和元年3月末時点で4名の職員が育児休業中である。また、今年度育児休業から復帰した職員が1名いるが、子育て世代のニーズを事業やサービスに活かすべく業務の見直しにあたっている。

また、専門職のキャリアアップ形成を考慮し、プロデューサー職と技術長職を新設し、現場の責任者であるマネージャー職と同格に置いた。これにより、職員が自分の志向にあったキャリアアップを図ることができるようになった。

職員の人材育成は、年4回の内部研修に加え、外部研修へ積極的に参加している。愛知県は劇場間の横のつながりが強いという特徴がある。その土壌を育んだのが、愛知県公立文化施設協議会の人材育成プログラムであり、ベテラン職員のノウハウを次世代に伝える仕組みと人間関係を構築している。公立、民間の分けなく、地域全体で人材育成に取り組んでいる。

なお、市から一部事業が移管されたことにより、財団職員の増員が認められ、令和2年度から正規職員25名体制になることが決定している。今後も専門的人材の育成及び地域に根付いた地域人の育成に力を入れていく。

このような取り組みにより、持続可能な事業運営を可能としている。

自主事業の収支推移
(H12～R1 まで) →

